

境界から考える多言語・多文化世界：GCOE研究会「多言語社会 ヴォイヴォディナ：交錯する境界・文化・アイデンティティ 1」に参加して

西原周子（北海道大学・大学院生）

旧ユーゴスラヴィアは多民族国家として知られていたが、少数民族を多く抱えるセルビアは、特に多くの民族問題を孕んでいる。セルビアの民族問題というコソヴォの紛争や独立問題などが多々言及されるが、北部のヴォイヴォディナ地方も、セルビアの民族問題を理解する上で等しく重要である。

ヴォイヴォディナ地方の面積は、約21,500平方キロメートル（関東地方の2/3ほど）で、およそ200万人（札幌市と大体同じ）が居住している。セルビア人が人口の6割以上を占めるが、その他の民族構成はかなり複雑で、それはこれだけの面積、人口に対し、6つの公式言語（セルビア語、クロアチア語、ハンガリー語、スロヴァキア語、ルーマニア語、ルシン語）が設定されていることから明らかであろう。尚、公式言語は上記の6言語だが、バナト・ブルガリア語のように地域レベルで公式化が進みつつある言語も存在する。そして非公式な言語まで含めると約30になるとも言われている。

これらの民族はさまざまな意味における「境界」と関わって暮らしている。それは国境を越えた民族的母国との関係、共存する他民族との精神的あるいは文化的境界など極めて多様である。本研究会では、この「境界」からヴォイヴォディナ地方が持つ、多言語・多文化性について明らかにしていくことを目標としているものであり、今回はその第1回目の研究会であった。

研究会第1部では、リュドミラ・ポポヴィッチ教授（セルビア、ベオグラード大学）による「セルビアのルシン人とウクライナ人：いかに彼らがお互いに編みこまれているか」と題された報告であった。

ルシン研究の重要な側面の1つとして、あらゆる意味でウクライナとの関係が挙げられる。すなわち「国境を越えた母国」を巡る諸問題である。

報告ではルシン人とウクライナ人の歴史や、彼らの起源についての議論が概説され、セルビアのルシン人とウクライナ人は、本来同じ少数民族(national minority)なのだが、オーストリア＝ハンガリー時代から政策によって分断されてきたと結論づけられた。またマイクロ言語としてのルシン語やその文学は引き続き発展し、ウクライナ語は少数言語としてだけでなく一国家の言語として重要性を拡大すると予測されていた。また、ハヴリイル・コステリニクの著作に

基づき、ウクライナ語、ポーランド語、スロヴァキア語やセルビア語がルシン語へ与えた影響についての言語学的分析を紹介しながら、ウクライナ語とルシン語の起源に関わる議論はもはや過去のものであると批評された。

興味深いのは、講演では“Ruthenian”という語が一貫して用いられていたことである。これは、ポポヴィッチ教授が明らかに「ウクライナ人＝ルシン人」という立場を取っていることと深く関わっていると思うが、それがどの人々、またはどの言語を指すのか、「ルシン人」と「ルテニア人」と呼ばれる人々の存在を考えるとややわかりにくく感じられたが、狭い意味に限定しないよう”Ruthenian”を選んだのではないかという印象も受けた。また、18世紀中盤まで国籍よりも「どこから来たか」の方が重要だったということが興味深かった。本人の認識によって「どこから来たか」も左右される可能性があるとするれば、人文地理学的なアプローチも可能であるように思う。

日本ではあまり知られていないヴォイヴォディナのルシン人の言語問題を考える上で大変興味深い報告であったが、必ずしも歴史的な起源や言語的な同一性が「民族」を決定するものではない。現地人の自己規定もその大きなファクターであろう。例えば、ブルガリアとギリシャの国境周辺に住むポマク人は、歴史的にも言語的にも明らかにスラヴ系のブルガリア人であるが、自身は宗教的側面からトルコ人と規定する傾向がある。また、歴史的に連続しているブルガリアとマケドニアの言語問題も、幾分ルシン問題に比せられる要素もあるように思われた。

第2部では、ミロスラフ・ドウドク教授（セルビア、ノヴィサド大学/スロヴァキア、コメニウス大学）による報告「スロヴァキア語における内的・外的境界：民族言語、ディアスポラ言語としてのスロヴァキア語」が行われた。ドウドク教授は、自身がヴォイヴォディナのスロヴァキア人マイノリティーであり、同時に作家でもある。この報告では、スロヴァキア語の言語的特徴を概説した上で、言語を細分化する境界線には内部のものと外部のものがあるが、スロヴァキア語の場合は260万人の話者（国内の話者の約半分にあたる）がスロヴァキア国外に在住しており、スロヴァキア語の境界線は国家の領域を超えていることが詳細に説明された。したがって、スロヴァキア国外にも方言が存在し、例えばヴォイヴォディナのスロヴァキア語はスロヴァキア本国の標準語と同等の地位を持ち得るのかということが疑問に思われた。

この報告で興味深かった点の一つは、スロヴァキア語が「対抗する」相手に変化してきているという指摘である。従来はチェコ語との区別がスロヴァキア語をスロヴァキア語たらしめることと直接的に関わってきたが、現在ではスロヴァキア語に英語の語彙が大量に入ってくるのが問題になっているのだということであった。

ドウドク教授の研究報告は、単なる研究報告だけではなく、現地人研究者による現状紹介の意味合いも深かったと思う。尚、余談になるが、ご自身がスロヴァキア語作家でもあるので、ご自分の作品をどのように規定するか伺ったところ、「私はスロヴァキア語で作品を書くが、自分はむしろ『ヴォイヴォディナの作家』という位置づけをしている。スロヴァキア文学でもあるが『ヴォイヴォディナ文学』と考えている」と言っておられた。ヴォイヴォディナのスロヴァキア人・マイノリティーは、移住以後200年以上もそのアイデンティティを保ち続けている「優等生」として知られるが、やはりそのアイデンティティは時間と共に変容することがあり、そこには何らかの「境界」が生まれているのではないかと感じられた。

第3部では、ヤロスラフ・ヴォイテク監督による映画「国境」（2007年）が上映された。この映画はヴォイヴォディナを扱うものではないが、中・東欧の国境問題とヴォイヴォディナとも関連する諸民族（ハンガリー人、スロヴァキア人、ウクライナ人）の多様性を理解するうえで、興味深いものであった。

この映画は、分断された家族や土地を観察することによって国境での生活を描き出すドキュメンタリーである。舞台となるスレメンツェというザカルパト地方の村は、1944年11月にソ連軍が進出したことに端を発し、ソ連とチェコ・スロヴァキアに分断された。この村の属する国家は今日スロヴァキアとウクライナとなっているが、住民のほとんどがハンガリー人であるということが興味深かった。

封鎖された国境を挟んで住民たちが会話する様子や、国境の反対側に住む両親を持つ花嫁の再現映像など、印象深い数々の場面とならんで、映画の前半では村の住民が国境警備兵にタバコを渡す光景が紹介されていた。その後スレメンツェがEUの境界になったことで、それまでの動きから逆流するかのよう警備が厳しくなると、前半の場面との対比がシェンゲン協定による様変わりを効果的に印象づけていた。シェンゲン協定が国境を消滅させる可能性については

よく議論されるが、シェンゲン協定が逆に国境を強化する場合もあるのだと気づかされた場面だった。

この映画の後、ヤナ・ドウトコヴァー講師（スロヴァキア科学アカデミー演劇・映像芸術研究所）による作品解説が行われた。ヴォイテク監督は90年代世代と呼ばれるスロヴァキアのドキュメンタリー映画監督の世代に属していて、この世代の特徴はドキュメンタリー映画とフィクション映画の混合だという。この「国境」でも、現地人だけではなく俳優が起用されており、地元のハンガリー語ではなく、標準語のハンガリー語を話していたことが指摘されていたのも興味深かったが、同時にこの映画が真に問うものが何なのかということも考えさせられた。

ヴォイヴォディナの多民族・多言語・多文化の諸問題は、ある意味研究可能性の宝庫である。同時に旧ユーゴスラヴィア、ルーマニア、ハンガリー、スロヴァキアなどの諸地域研究者の共同研究が最も効果的に、かつ意義深く行われる地域でもあろう。今回は外国人報告者中心であったが、今後はさまざまなバックグラウンドを持った日本人研究者の積極的な参加と意見交換が望まれる。今後もGCOEの枠内でこの研究会が続けられていくとのことなので、次回以降も今回に劣らぬ充実した研究会が期待される。